JAPANESE JOURNAL OF INFLAMMATION
EDITORIAL*Message from the new chief editor*
*Satoshi Kitamura**

新編集委員長の挨拶

北 村 諭*

“屋根の上のバイオリン弾き”というブロードウェイ・ミュージカルがあります。そこで歌われる曲の歌詞に「Sunrise, sunset, sunrise, sunset, swiftly flew the year…」という節があります。

本当に月日は矢のごとく過ぎ去っていきます。私が第17回日本炎症学会会長を務めさせていただいてから、もうすでに1年半の歳月が過ぎ去ってしまいました。私の記憶では、昭和58年(1983年)に藤村 一先生が、第4回の本学会を東京で開催されたときに、一般演題の座長をさせていただきました。翌年の昭和59年に、教授であった高久史麿先生が、第5回の本学会会長を務められたときに、当時、東大第三内科の講師(外来医長)であった私が、学会のお手伝いをさせていただきました。その当時、高久先生が初代の編集委員長をされており、私も編集委員の末席を汚していたわけであり、高久先生の議事進行は、じつに迅速・明快であり、編集会議を20分で終了したように記憶しています。

柏崎禎夫先生が第二代の編集委員長にご就任されたのは、一昨年、平成8年春のことであり、平成9年1月号に、ご就任の挨拶が掲載されました。先生が編集委員長になられてからは、皆さんも御存知のように、表紙をじつにユニークなデザインに変更され、葉欄も充実させ、さらに第4種郵便物許可を取るなど、アカデミックな面ばかりでなく、経営面でも非常に大きな貢献をされました。

先生のこれからのご活躍が大いに期待されていた矢先、昨年11月の炎症学会直前に、先生はご逝去されました。私は栃木の田舎に住んでおり、世情に疎いため、先生のご病気のことはまったく存じておらず、まさに青天の霹靂でした。そのときに開催された理事会の席において、不肖、この私が、水島理事長から第三代の編集委員長を拝命したわけがあります。

学会雑誌「炎症」は、編集委員の諸先生と学会事務局のご支援により、前委員長の敷かれた路線を順調に走っています。私はこのダイヤを守り、列車を順調に正確に運行し、地平線の彼方にある遠い目的地へと走らせつづけたいと考えております。諸先

* Department of Pulmonary Medicine, Jichi Medical school 自治医科大学呼吸器内科学教室

生方の暖かいご支援のほど、切にお願い致します。

わが国では、世界にも例のない猛スピードで高齢化が進行しています。高齢化社会白書によりますと、2020年には65歳以上の高齢者人口は約3,300万人となり、四人に一人以上が“老人”になるとされております。日本の医学会を振り返ってみますと、高齢化の波はさらに加速度を増していると考えられます(学会員の四人に一人が“老人”になる)。最近、厚生省が非常に近い将来に、年金支給開始時期を65歳から引き上げざるをえないと明言しています。米国では、人種や民族による差別と同様、年齢による差別が連邦法によって禁じられ、大学では相次ぎ定年制を廃止しているのが現状であります。大学はともかくとしても、日本の世論をリードする医学会が65歳の定年制を実施するのは本当に妥当なことでしょうか。65歳を過ぎたら、職を失い、年金も支給されず、学会活動も禁じられたら、どうして生きていったらよいのでしょうか。理事・評議員の定年制を見直すのがひとつの案ではないでしょうか。

過日、東京医薬品工業協会の幹部3名が、日本呼吸器学会代表・理事長としての私のところに来られ、平成10年秋以降開催の学会費用は、すべて、東京・大阪の本協会の窓口を通すことになったとの報告があり、学会運営への寄付金が大幅に減少する可能性を示唆されました。これからの学会運営はきわめて厳しくなるものと思われます。

日本炎症学会は、炎症研究振興会の絶大なご支援により、これまで運営してきました。今後もこの信頼関係を維持し、日本の炎症研究の更なる発展を期待いたします。